

才十九軍司令部部隊略正

堅九四五〇

部隊長官氏名

陸軍中將

北 富
野 永
憲 信
造 政

	概 要
昭 二 八 一 五	初代軍司令官に富永信政中將をいたし、 爪哇島「ジャカルタ」に於て編成完結 位置 終戦時 アンボン島 後 へ 兵出身地 編成担任部隊 (補充) 西部 軍司令部

年 月 日	概	要
昭 三〇、三 元	月日不詳に軍司令官病死更迭 二代軍司令官として 北野憲典中将着任	「バンダ」海「アンボイナ」島「アンボン」に於て復員完結 参加せる主要なる作戦の概要 〔整備、戦斗、行軍、輸送〕
自 一、一 一五 至 一、一 三〇	袁州地方に於ける作戦準備並に防犯	
自 一、一 一五 至 一、一 三〇	豫北地区防犯作戦	
自 一、一 一五 至 一、一 三〇	豫北地区防犯作戦	
自 一、一 一五 至 一、一 三〇	終戦より帰還迄の行動	

0400

0401

才十九軍野戰貨物廠部隊略正

豪北派遺堅三五〇七部隊

部隊長名

陸軍主計大佐 井上米雄

年月日	概	要
昭和 一八 二一 一 九 一 五	編成地及年月日 編成 完結 ジャワ島スラバヤ 位置 終戦時 バンダ海セラム島 後 同 右 兵出身地 福岡県 大阪府 其の他	

年 月 日	昭 三 六
概 要	オニ軍の指揮下に入る 部隊改編、オ五師団長の指揮に入る（補給隊） 編成整備及指揮隷属関係及其の支應の概要 隷属関係 オ十九軍司令官、オニ軍司令官、（昭三〇、三月頃） オ五師団長 編成整備 廠（総務部、衛生材料部、衣糧部、獣医材料部） 勤務中隊 被服移動修理班 給装馬具移動修理班 支應の概要 編成より昭三〇、三月迄 オ十九軍司令官に隷属せるも 十九年改編により「ニューギニア マノクアリ」より転進の

年月日	概	要
		オニ軍の指揮下に入り 同年六月オニ軍「セレベス」に転進せるに及び森も改編せられ 森長井上大佐は オニ軍経理部長に転出 森は新にオニ五師団補給隊として、同地に留り、オニ五師団長の指揮に入 る。 終戦より帰還点の行動の概要 バンダ海セラム島「ラウイン」に在て終戦 午後、同島「アリアケ」に集結 漳州軍より一部の糧秣の補給を受けつゝ現地自給を為す 部隊の修正中、特異と認めらるゝ事項及部隊長官氏名補給業務の広範 なるに及し、補給装備の貧弱 陸軍主計大佐 井上 米 男（一代のみ）

野戦高射砲中隊第四大隊部隊略正

部隊長 伊達宗克

年月日	概要
昭和二十六年七月二十六日	兵庫原加古郡加古川町 高射砲中隊三重隊に於て動員下令 動員完結 宇品港を出發、滿洲に向ひ 大東亞戰爭勃發と共に 比島「ボルネオ」の哇小「ズング」列島に転戦 ル後、臺北地区に転戦 主なる作戦並に警備、左記の如し 左記 作戦（警備） 關東軍特別演習に参加

至	自	至	自	至	自	至	自	至	自	至	自	昭	年 月 日	概 要
二 二 二	二 二 二	一 八 二	一 七 二	一 二 二	一 一 六	九 五 五	五 一 七	一 一 六	一 一 四	五 三 三	三 一 〇	一 九 一		中部「ジャワ」攻略戦に参加
														中部「ジャワ」攻略戦に参加
														中部「ジャワ」及「バタビヤ」附近の防空並に警備
														小「スンダ」列島警戒作戦に参加
														「チモール」島警戒作戦参加
														「チモール」島警戒及警備
														小「スンダ」列島警備
														素州北方地区に於ける作戦準備及防犯作戦

年月日	自 至 自 至 自 至
要	濠洲北方地区に於ける防行作戰 濠北地区防行作戰 右期間中昭和十九年頭初の頃より 次第に後方補給困難となり、遂に同年中頃より全く杜絶の狀態となり 對空戦斗の余暇を利用し現地自若に進進せるも 悪疫瘴癘の下兵力の低下は更に甚だしく 入院後送患者続発し戦斗力は半減し 對空戦斗は日増しに熾烈を極めたるも 志氣益々旺盛にして防空任務に邁進せり 終戦後は「ケイツラ」島終戦兵器集結管理官となり 専ら兵器の処理業務に任じ益々現地自若強化促進に邁進したるも

-258-

0408

年月日	概 要
昭和一一	連合軍の進駐に伴い、
三一	島島方面の全兵力は「ケイズラ島」に集結を命ぜらるるに当り、 在「タニレバル」諸島のオー中隊は、 其主力の部隊は復帰するに及び、 再び給養は最悪の状況に陥りたるも、 漸く連合軍の好意により糧秣の補給を得半じて余命を保つ 事を得たり
三六	には建築勤務ヲ五十四中隊 ヲ二小隊 ヲ四小隊
四二	には歩兵ヲ二十一連隊ヲ二大隊の転属を受け、 編成定員の二倍に及ぶ人員を擁するに至りたり 又、在「セラム」オ三中隊は現地にありて 輸重兵ヲ五連隊に転属す
元	復員給養給津備を命ぜられ「トアール」跡商宿舎に入りて特赦

年月日	概要
昭二五〇 六 一	「リバティ」型Vの4号に依り同地を出帆 途中「モロタイ」島に寄港 青島方面オ一ス復員船として 和歌山県田辺に入院 上陸迄に於て部隊は全く復員を完了せり 正代部隊長名 一、陸軍少佐 高木 猛 雄 二、中佐 伊 達 宗 克

野戦高射砲第六十九大隊部隊略正

年月日	概	要
昭和六〇年六月	軍令陸甲九十三号に依り	
〃	野戦高射砲第六十九大隊編成下令	
〃	千葉県市川市野戦重砲兵第十八連隊補充隊に於て	
三〇	編成完了	
四	編成地出発	
八	門司港	
一七	高雄港寄港	
一九	出帆	
二五	「マニラ」港寄港	
三七	出帆	
一四	「ハルマヘラ」島上陸	
	以後「ハルマヘラ」島の防空勤務に従事	

年月日	概要
昭和四八	野戦高射砲六十九大隊現地復帰下令
一〇	現地復帰完結
〃	第三十二師団野砲大隊三十二連隊に転成す
八十四	終戦
三五	内地帰還のため乗船「ハルマヘラ」出帆
六三	和歌山県田辺港到着
五	田辺港上陸、復員完結
正代部隊長名	
野戦高射砲六十九大隊長	
陸軍少佐	
上田 豊	
野砲兵第三十二連隊第二大隊長	
陸軍少佐	
上田 豊	

ス
4
ハ

ア
ン
ボ
ン

独立野戦高射砲ヲ四十三中隊略正

年月日	概	要
昭 六 十 七	行動の概要	
	千葉泉市川市国府台	
	野戦重砲兵ヲ十七連隊補充隊に於て編成着手	
三 五	編成完結	
	南北派遣の為	
	宇品港出帆	
一 九	「マニラ」港上陸	
	同日より同地の警備に任ず	
一 九	「マニラ」港出帆	
	「セブ」「ハルマヘラ」を全て	
二 一	「アンボン」島「アンボン」港上陸	
	同日より同地の警備に任ず	
三 四	転進の為「アンボン」港出帆	

年月日	概要
昭五三四	同日「セラム」島「アマハイ」島に上陸 同日より同地に展南防犯に任ず 終戦後主として現地自活に邁進
三三七	連合軍の命に依り 「セラム」島「ホマアル」半島（ニノクス地区）に移駐を命ぜらる
三二	内地帰還（復興）の爲 「ニノクス」地区「アサウデ」に於て乗船出帆
五三〇	田辺入港上陸 復興完結す
六一	征代中隊長 陸軍大尉 原 常刀 （現住所） 金沢市白山町一〇三

第十九軍独立野戦高射砲才四十四中队部隊略正

輝二二三三部隊

年月日	概	要
昭和十八年三月	軍令陸甲才三八号に依り 独立野戦高射砲才四十四中队の編成を命ぜられ 東部七十二部隊補充隊に於て編成に着手 (日推定)	
三月	東部七十二部隊補充隊に於て編成	
三月	宇品港出帆	
三月	金山港寄港	
三月	宇品港 "(日推定)	
三月	台湾高雄港寄港	
三月	マニラ附近の警備並に作業	
三月	マニラ港出港(日推定)	
三月	ハルマヘラ島ワシレ寄港	

年 月 日	概 要
昭 一 九 二 一 一 〇	モルゲン群島アンポン島着 尔後同地リアン附近の防空に任ず (月推定) 将 校 一 下 士 一 兵 五
自 二 〇 四 三	混成隊 部隊に専属 (月推定) (日推定) 戦 死 兵 一 戦 傷 死 〃 二 戦 病 死 〃 二
至 二 六 一 六	(日推定) 作戦任務を解除さる セラム島ホーマル島に転進 同地に於て終戦処理業務並に現地自活 復興完結 正代部隊長名 陸軍大尉 石川 賢 治

才十九軍独立野戦高射砲才四十五中队略正

(輝才二二三部隊)

年月日	概	要
昭 一 八 三 三 七	独立野戦高射砲才四十五中队の編成を命ぜられ 野戦兵才十八連隊補充隊に於て 編成に着手 (主力は、防空才四連隊より送出せる) (日推定)	
一 九 一 三	野戦重砲兵才十八連隊補充隊に於て 編成完結 守品港出港、濠洲に向ふ (日推定)	
一 二 二	高雄港寄港 同日出帆	
一 八	(日推定)	

年月日	概	要
昭 元 一 二 三	マニラ港寄港 マニラ港出帆 (日推定) ハルマヘラ島ワシレ港寄港 翌日出帆 (日推定) アムボン島アンボン港寄港 (赤沢部隊(飛行建隊)の指揮下に入る) (日推定) アムボン島アンボン港出帆 ブル島ナムレア港入港 飛行外三大隊の指揮下に入り 尔後同地附近の警備 (日推定)	下士官一、兵六 (兵の人員推定)

年 月 日	概 要
昭 五 二	セレブス方面に転属（部隊名不明） （月推定） 下士官 二（人員推定） 兵 二（ ） マニラ及ジャワ方面陸軍病院入院 （月推定）
二 〇 七	戦病死 兵一 （日推定）
ハ 三 四	作戦任務を解除さる （月推定）
九	終戦処理業務並に現地自活 （日推定）
二 五 四	復員の為アサウデ收容所に集結 （日推定）
三 〇	復員の為アサウデ港出帆
二 五	（日推定）

ス
6
1
フ
ポ
ン

年 月 日			概 要	
昭 三 五 二	自 三 二 一	至 四 三 〇	毛口タイ寄港 田辺港上陸 復員完結	
			病 死 下士官	一
			事故死	一
			部隊長名	
			陸軍大尉 森 本文 雄	

独立野戦高射砲才四十六中隊部隊略正

(輝 才二二三四部隊) 部隊長名 陸軍中尉 喜舎場 寛

年月日	概 要
昭 六 三 一 七	陸軍部により臨時招集し 主力は東京防空才五連隊の將兵にて動員完結 早々出陣南方ハルマヘラ島カレラに於て 才三十二師団野戦才三十二連隊才三大隊に編入す 編成地 千葉県市川市野重十八補充隊 兵出身地 東京 千葉 茨城 宮城 群馬

年 月 日	概 要
	位置 楠 木 ハルマヘラ島ガレラ 一、ハルマヘラ島ガレラ飛行場警備の任に依り 終戦迄対空戦斗を續行す 二、終戦後引続きガレラ地区に於て 現地自活致し居り 昭和二十年末ハルマヘラ島タル地区に移駐し 連隊本部所在地に於て 現地自活作業を繼續す

- 4100 -

0422

独立野戦高射砲才四十七中隊部隊略正

源二一三五 部隊長名 陸軍大尉 永田 胖

年月日	概 要
昭 六 三 五	編成地 千葉県国府台野重七 位 置 終戦時 ハルマヘラ島 " 復 全 右 部隊略正の概要 千葉県国府台に於て編成 宇岳港より出帆 ハルマヘラ島到着 輝部隊直轄 ハルマヘラ島防空 " 終戦

スク内

ア・ボン

年月日	
概要	要
	参加せる主要なる作戦の概要 一警備、戦斗、行軍、輸送 ハルマヘラ島防空一切 終戦より帰還迄の行動の概要 ハルマヘラ島に於て帰還迄移動せず 死傷 損耗 戦死 十二名 病死 十二名

独立野戦高射砲才五十中隊部隊略正

中隊長大尉 村田正美

年 月 日	概	要
昭 一八、 十二 六 二七	臨時編成下令 大東亜戦争参加の為 宇品港出港 濠北地区に出動 尔後「アンボン」及「ケイ」諸島「ケイズラ」島に上陸 対空戦斗に参加 該期に於ける主なる作戦警備並損耗人員左の如し 編成並輸送業務 濠北地区防行作戦 公病に依り入院後送機所在不明者 兵一名	
自 一八 一九 二二 二六	至 一九 二二 二六	自 一八 一九 二二 二六
至 一九 二二 二六	至 一九 二二 二六	至 一九 二二 二六

-- 404 --

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
<http://www.jacar.go.jp>

独立野戦高射砲才五十一中隊部隊略歴

中隊長 林田一夫

年月日	概要
昭和六一年二月一	編成下令
二九	編成完結
一七	大東亜戦争参加の為
二九	釜山港出発
	濠洲地区に進出
	「アンボン」島「セラム」島要地の防空並に警備に任ず
	該期間に於ける主たる作戦
	警備並に損耗人員左の如し
自一九二	濠洲地区防空作戦
至二八	アンボン島に於て防空（戦斗九回）
	戦病死 兵二名

ス
ポ
内

ア
ン
ボ
ン

年 月 日	至 自 元 ハ 二 三 一
概 要	濠北地区防犯作戦 「セラム」島「ビル」に於て （対空戦斗五三回） 別命に依り作戦中「セラム」南岸「アテア」附近海上に於て交戦 下士官 一 戦死 「セラム」島「ビル」対空戦斗に於て 下士官 二 負傷（後送内一戦病死） 兵 一 戦病死 正代部隊長名 大尉 林 田 一 夫

0428

第十九軍独立野戦照空才十中队部隊略正

年月日	概	要
昭 二 三	軍令陸甲才 号に依り 東部七十六部隊（気球隊）に於て 独立野戦照空才十中队の編成を命ぜられ 編成完結 編成内容左の如し 兵員 将校以下 一八六名 兵員 一、五米照空燈 六（發電車付） 聴音機 六 計算及監視用具 若干 編成部隊出發 宇品着	

年月日	概要
昭和 八 三 三	宇品出發 同時にオニ方面軍司令官の隷下に入り 濃北方面に向ふ
五 一 一〇	マニラ着 在内地離重緒前に於て 当隊は「ハルマヘラ」島に到り 野戦オニ根拠司令官武田少将の指揮に入るべく命ぜられ 「マニラ」出發 「ハルマヘラ」島着 直に武田少将の指揮に入り 同島の防空に任ず
五 中 旬	オニ方面軍命令により オニ三十二師団長の指揮に入らしめられ 依然同地に在りて前任任務続行 戦況の悪化に伴い師団は「ワシレ」防空隊を編成し
七 中 旬	

年月日	概要
昭和 一九七三	部隊は「ワシレ」防空隊長上田少佐の指揮に入る。
百五十九	戦傷 兵三
三三三	戦死 兵一
二六二〇	戦傷 兵五
二六二〇	部隊現在員全部 オ三十三師団歩兵オ二百十二連隊に 率直を命ぜらる。
二六二〇	但し防空戦に閑しては依然 「ワシレ」防空隊長上田少佐の指揮下に在りて 前任務履行中
八二四	終戦となる
二六二〇	終戦後依然同地に在りて終戦業務に版し 内地帰還となり
二六二〇	復員見結す

- 407 -

0431

才十九軍獨立野戰照空才十一中隊部隊略証

調整官 陸軍少佐 古一世 前

年月日	概要
昭和六三 三	軍令陸甲才 号に依り 更部才七十六部隊（別隊）に於て 獨立野戰照空才十一中隊の編成を命ぜられ 編成完結 其の内容左の如し 編成内各 兵員 將校以下 一八六名 兵器 15mm 照空燈 大座（發電車附） 聴音機 大機 計測及監視用具 編成部隊出發

1410

0432

年月日	概 要
昭和 一六 一三 一四	宇呂着 宇呂出發 同時オニ方面軍司令官の隷下に入り 濠北方面に向う マニラ寄港 部隊は「アンボン」に到着を命ぜらる 「ハルマヘラ」島西方海面に於て 敵潜水艦の攻撃を受け 照空燈六灯を沈没せる 「アンボン」到着 オニ方面軍命令により、部隊は圖に 在「アンボン」防衛隊長上木中佐の指揮に入り アンボン防衛隊となり 同地の防衛に任ず 部隊の一部は高射オ四四大隊に転属

年月日	昭 三 六 三〇
概要	要
	戦況悪化に伴ひ 部隊の主力はオ五師団に 一部は高射砲オ四四大隊に転属を命ぜられて 埒に於て当部隊は現地復師となる

- 4/2 -

0434